

中央アジアの仏教寺院を掘る

—キルギス共和国、アク・ベシム(スイヤブ)遺跡・第2 仏教寺院址の調査(2022)—

岩井 俊平 龍谷大学龍谷ミュージアム准教授
 栢本 哲 元・大阪府文化財保護課技師
 國下多美樹 龍谷大学文学部教授

Excavating the Buddhist Temple in Central Asia: Investigation of the 2nd Buddhist Temple at Ak Beshim (Suyab), Kyrgyz Republic (2022)

IWAI, Shumpei Associate Professor, Ryukoku Museum, Ryukoku University
 MASUMOTO, Tetsu Former Archaeological Researcher, Cultural Property Preservation Division, Osaka Prefecture
 KUNISHITA, Tamiki Professor, Faculty of Letters, Ryukoku University

岩井
俊平／
栢本
哲
ほか

1. はじめに

キルギス共和国のチュウ川流域には、6～7 世紀頃にシルクロードを通じて仏教が伝えられ、都市遺跡であるアク・ベシムの中にも、3 つの仏教寺院址が存在している。このうち第2 仏教寺院址(AKB-18 区)で

は、1950 年代に祠堂が発掘され(Зяблин 1961)、内陣を二重の回廊が囲む特徴的な平面プランを持つことが明らかとなった(図1)。このような平面プランの祠堂は、中央アジアの各地で古くから認められるため、チュウ川流域の仏教寺院が周辺地域からどのように影響を受けて建造されているのかを知るうえで、重要な

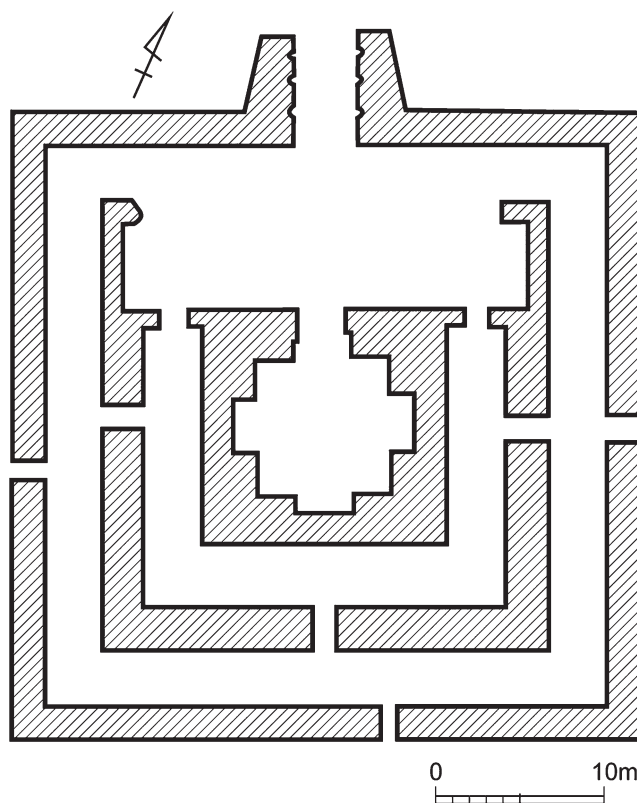


図1 アク・ベシム第2 仏教寺院祠堂



図2 1966年の航空写真

遺構となっている。また近年、1960年代に撮影された航空写真等を分析したところ、この祠堂の東側に隣接して、もう1つの方形建物が存在していたことが明らかとなった(図2)。しかしながら、これらの遺構は1970年代に行われた周辺地域の農地化の際にすべて破壊されてしまい、地上からはその痕跡が消滅してしまっている。そこで龍谷大学は、キルギス共和国国立科学アカデミーと共同で当該地域の発掘調査を行い、地表下に残る遺構を確認することとなった。発掘は、2022年4月から5月にかけて実施された。

2. 調査の目的と調査地点

アク・ベシムの第2仏教寺院址は、ソグド人が建造したと考えられる街である第1シャフリスタンの南門から、南東に約400mの地点に所在する。上述のとおり、この寺院は複数の建物からなる伽藍を形成していたと考えられ、実際に1960年代の航空写真でも、祠堂と方形建物の周囲に、他の建造物や外壁の痕跡が認められる。そのため、第2仏教寺院址全体の平面構成を明らかにして、中央アジア各地の仏教寺院址と比較研究を行うことが本調査の最終的な目的である。

2022年の調査では、祠堂に隣接する方形建物の検出を目指し、2018年に帝京大学が設定した同地点の調査区を一部拡張し、改めて精査した。調査区の大きさは、南北10m×東西15mである。その結果、以下に記すとおり、粘質土を層状に積み上げた「積み土遺構」が検出されたため、その構造を把握するためにサブトレンチを設定した(図3)。

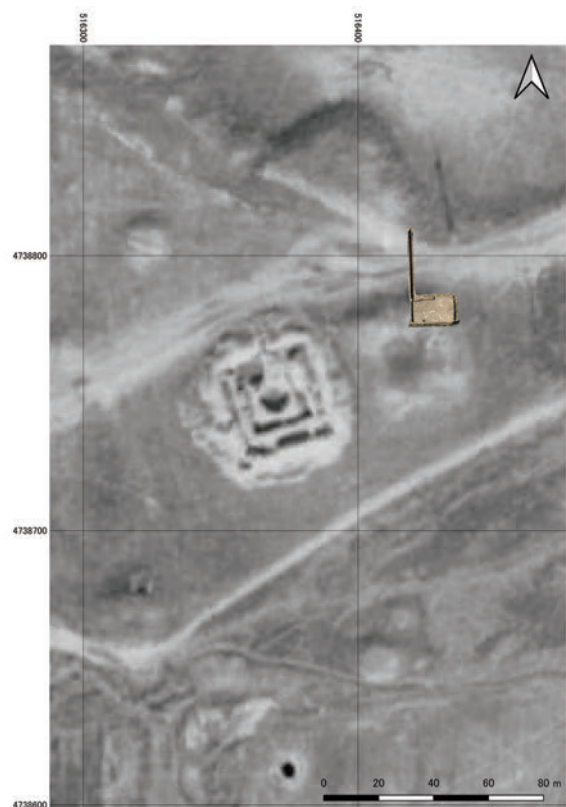


図3 2022年の調査区の位置(望月秀和氏作成)

3. 確認された遺構

まず調査区北西部の上層(地表下約40cm)で、ピットや土坑を検出した。特に後者は、東西方向が5m以上あって、その範囲が調査区外に及んでいるため全形は不明であるが、溝であった可能性も考えられる。中からは焼土・灰・炭・土器・スラグ片・動物骨が大量に確認された。出土土器の多くは、櫛原功一による編年(櫛原2020)のⅣ段階～Ⅲ段階に属すると考えられる。同じ土坑(あるいは溝)から出土した炭化物の放射性炭素年代測定では、概ね8～9世紀の年代が与えられていることから、これらの上層遺構は仏教寺院廃絶後に属すると想定されるが、年代については今後の精査が必要である。

また、調査区中央のやや東側では、南南東―北北西の方向に直線的に延びるラインと、その西側に広がる灰白色粘質土の面を確認した(図4)。この遺構は、2018年の帝京大学の調査においてすでに確認されていたが、調査期間の関係から精査を行うことはできていなかった。同遺構は調査の目的である方形建物と直接的に関係する可能性が高いため、今回の調査で改めて構造の確認を行うこととし、当初は広範囲で平面的に精査を行ったが、その規模や性格を明確にすること

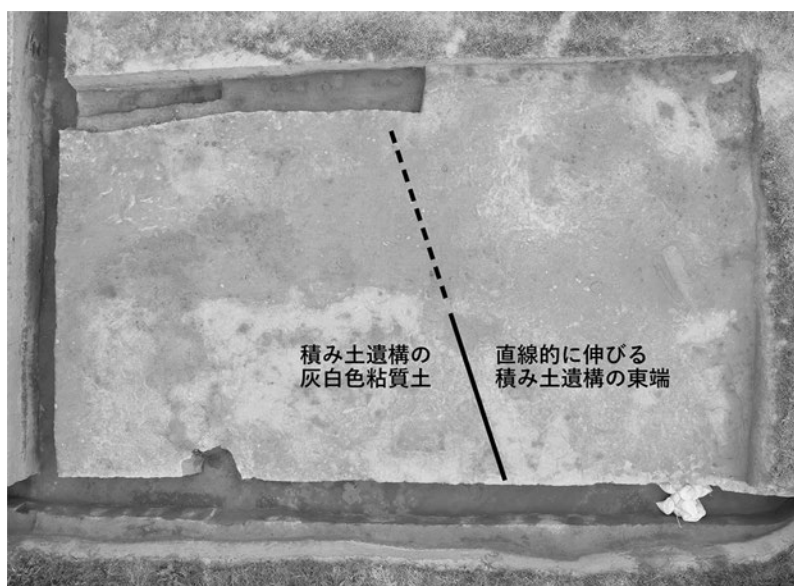


図4 積み土遺構の検出状況

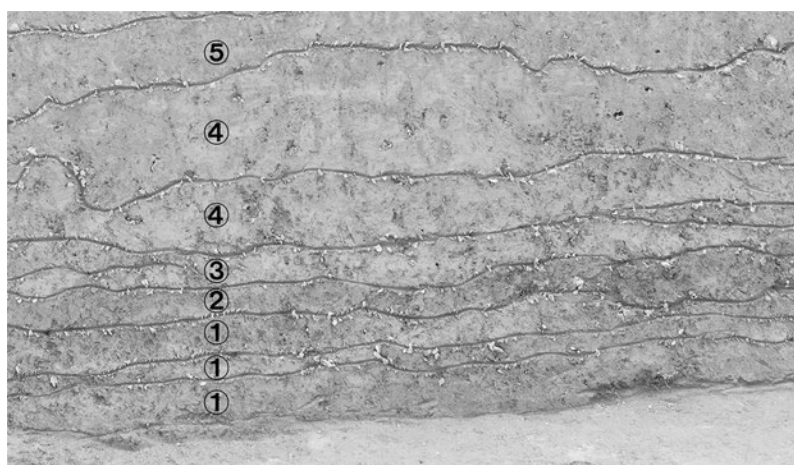


図5 南側サブトレンチにおける積み土遺構の断面

ができなかった。そのため、調査区の南辺と西辺にサブトレンチを設定して、遺構の規模と構造を確認した。

4. サブトレンチの調査

最初に、調査区南辺に幅 1.5 m、深さ 1.5 m のサブトレンチを設定した。その結果、調査区東端より 5 m 付近の地点から西側全体に、粘質土を層状に積んだ遺構が続いていることが明らかとなった(図5)。その構築方法は以下のとおりである。

- ① 灰褐色・黄褐色で締まりのある土を、2～3 層にわたって敷き、整地する。各層の厚さは 4～10 cm ほどである。
- ② 灰褐色から赤褐色で、白色の粘土粒を多く含む締まった粘質土を、厚さ 5～10 cm ほど積む。
- ③ 赤褐色で、白色の粘土を層状に多く含む締まった粘

質土を、厚さ 3～8 cm ほど積む。

- ④ において、褐色で、白色の粘土粒を粒状・層状に多く含む粘質土を厚さ 5～12 cm ほど積む。
- ⑤ 部分的に、灰白色で白色の粘土粒を多く含むシルト質土を厚さ 5～10 cm ほど積む。

以上のような互層がサブトレンチの西側全体で確認され、調査区西端まで続いていた。したがって、平面的に確認されていた南南東―北北西の方向に直線的に延びるラインは、この積み土遺構の東端の立ち上がり部分であった可能性が高い。また、このサブトレンチの最下層では、細かな砂の地山層が確認された。この地山は調査区全体に広がっていると考えられる。

続いて、上述の積み土遺構の北端を確認するために、調査区西辺に幅 1.2 m、深さ 1.5～2.0 m のサブトレンチを設定した。さらに調査区北部の状況を確認するた



図6 2022年の調査区全景と西側サブトレンチ(帝京大学文化財研究所提供)



図7 西側サブトレンチの断面

め、このサブトレンチを北に約25m拡張した(図6)。断面を確認した結果、積み土遺構は調査区の北側に向かって続いているが、北側にいくほど粘質土の互層は明確ではなくなり、雑然とした積み方に化する。そしてこの積み土遺構は、サブトレンチ南端から約7.4mの地点で、上述した大型の土坑(あるいは溝)によって壊されていた(図7)。したがって、積み土遺構の北端を確認することはできなかった。一方で、この調査により大型の土坑が複数回にわたって掘り込まれ、そのまま北側に向かってなだらかに傾斜していることが明らかとなった。

5. 調査成果と今後の展望

以上のとおり、2022年の調査においては、いくつかのピットや土坑のほか、粘質土を複数層にわたって積み上げた「積み土遺構」が確認された。これによって、この地点に何らかの人工の建造物が存在していたことが判明した。しかし、この積み土遺構が建造物の壁なのか、建造物自身の基壇あるいは建造物内に設置

された何らかの基壇であるのか、あるいはそうした建造物を建てるための整地であるのかは明らかにすることができなかった。

一方で、このような土の積み方は、これまでアク・ベシムの第2シャフリスタンの南壁や、第1シャフリスタンの南壁・東壁で部分的に確認されていた「版築工法」によく似ている。したがってこの遺構は、この地に唐の勢力が到来した7世紀後半以降に構築された可能性が示唆されるものの、版築に比べて土層の締まりは弱く、現状では壁と完全に同一の工法と捉えることにも問題がある。また、かつて発掘された第2仏教寺院址の祠堂は、パフサと日干レンガを使用した中央アジアの伝統的な工法で建造されていることが明らかとなっている。したがって、もし積み土遺構の工法が唐の版築と関連するものであったとすると、由来を異にする建築技法がほぼ同一の地点で共存していることになり、アク・ベシムという都市の性格を把握するうえでも非常に興味深い成果と言えるであろう。

いずれにしろ今回の調査では、積み土遺構の規模を確認することはできなかった。そのため、今後の調査では遺構の規模を明らかにすることを目指すとともに、この積み土遺構と既掘の祠堂との位置関係・上下関係を明確にすることも重要な課題の1つとなる。

最後に、共同で本調査を実施してくださったキルギス共和国国立科学アカデミーのバキット・アマンバエヴァ氏をはじめとする同国関係者に感謝を申し上げたい。なお、本調査は科学研究費補助金・基盤研究(B)「中央アジアの仏教遺跡における地域間交流の研究」(代表：岩井俊平)および基盤研究(S)「シルクロードの国際交易都市スィヤブの成立と変遷—農耕都市空間と遊牧民世界の共存—」(代表：山内和也)による成果の一部である。

参考文献

- ・Зяблин, Л. П. 1961 *Второй Буддийский Храм Ак-Бешимского Городища*. Фрунзе, Издательство Академии Наук Киргизской ССР.
- ・岩井俊平 2019「中央アジアにおける仏教寺院の伽藍配置の変遷」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集 79-97頁。
- ・加藤九祐 1997『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』シルクロード学研究4 シルクロード学研究センター。
- ・榎原功一 2020「アク・ベシム遺跡の土器編年試案」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集 1-16頁。
- ・帝京大学文化財研究所編 2021『アク・ベシム(スィヤブ2018)』帝京大学シルクロード学術調査団調査研究報告2 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所。